



## 第39回 就活のとらえ方

### ▼就活のシーズン

就職活動といえば、学生にとって大きな試練である。仕事を見つけるためにひたすらエントリーをおこなう。不採用が続くと、まるで自分の全人格を否定されたような敗北感を味わうことになる。医療職は専門職ばかりなので、あまり企業就活と縁がないのだが、友人の話聞いてみると、もし自分だったら「もう就活やめたい」と思うのじゃないかと考え込んでしまう。「街場の教育論」で内田樹が面白いことを書いている。彼は企業の人事担当に「採用するかどうかどこで決めるの?」と聞いたところ、じつは面接室に入って5秒くらいで決まるのだそうだ。あとの時間は雑談らしい。その理由は、「この人といっしょに働いてみたい」と感じさせるオーラがあれば、だいたい間違っていないとのこと。それは、本人の表情や雰囲気ですぐにわかってしまうのだそう。つまり、見る側は言葉で表せない身体感覚で相手を判断しているともいえる。ところが、学生たちは「自分のどこがアピールポイントか」「ぼろを出さないようにするには」など、自分の売り込み文句を一生懸命に準備している。

### ▼競争に勝ち抜くことと協働すること

内田は、この面接におけるすれ違いを、次のように分析する。「大学までは受験勉強をくぐり抜けること、これは努力すれば一定の結果が出るもの。ひとりで戦ってがんばれば結果がついてくる。でも、仕事というのは、たくさんの仲間と協働することですんでいく。つまり、人より努力して競争に勝つこと、ではなくて、人と協力して結果を出していくこと、そういう志向をもった人が必要なのだが、学生はその点に気づいていない。」なるほど、そういうことかと腑に落ちる思いだった。試験は点数で評価できるが、仲間と協働する力をどうやって評価するのか。それが、面接官たちの肌感覚(身体感覚)だとすれば、取り繕うのはかなり難しいかもしれない。

### ▼協働する場としての仕事

競争は勝ち負けを伴い、勝者と敗者がある。世間は勝者に注目するが、勝者は一人だけで、2番、3番は注目されない。もちろん、勝者になるため、骨身を惜しまず努力することは大切なことではある。でも、ほとんどの人間は勝ち続けることなんかできない、負けのほうが多いものだ。そして、他人と協働する力というのは、もしかすると負けから学ぶことのほうが多いではなからうか。芥川龍之介の「蜘蛛の糸」で、地獄から抜け出そうと、われ先に蜘蛛の糸に飛びついて、他人を蹴落とそうとあがいている人(カンダタ)と、自分よりも他人に糸をゆずる人。競争社会はカンダタでないと生き残れないぞ、といわれるかもしれないが、その生きる姿勢がその人のオーラに取り込まれているのだとしたら。就活の時だけ、自分を取り繕うのは難しいのではなからうか。



鳥取大学医学部  
地域医療学講座  
教授

谷口 晋一  
(たにくち しんいち)